

911.32

才

新
の
り
り

一日市町

佐藤宗右衛



月日ハ百代のさざりてあり
よきも又旅人也舟のこゝろ
をうへるの口をささりて
うらたけの口をささりて
旅を押し
古人も多く旅の死地
もいふれぬのまじり
はうりて便所のさみ
海濱のささりて

い 新屋うゝ 蜘蛛の古屋とてしつして
や ちんちんも早もく立ぬるあふさう
白川の川をくんとしつら神のあし
は ちんちんも早もく立ぬるあふさう
い ちんちんも早もく立ぬるあふさう
引の付とつりやとの流をくんとしつ
よ ちんちんも早もく立ぬるあふさう
い ちんちんも早もく立ぬるあふさう

一

別墅とて移るなり

早乃戸も後昔の代そひつるあ

面ハ台を、後の移るあふさう

末の七口切りの流をくんとしつ

を明して、ちんちんも早もく立ぬるあ

不二の峰、出しつるあふさう

ふの梢又いつとてつらちんちんも

ま、ちんちんも早もく立ぬるあ

兼て送るふしゆを言ひてに
とけりしそふ途にふりてのありし
物しゆさしりて幻のちりさしり
兼ふの備とてしりく

り春やをきき中々天の目共
もととてそのゆきしし行進を
てしゆとて人くは途中しゆとてし
し候しけのちゆきさしりとてしり

ことし元禄二とせし物奥羽書
のり師只もりしゆとてしり

共てしゆとてしり
年とてしり
ふしてしゆとてしり
しり其日何早かしり

そよふとてしり
しりわえしりしり

うしちまはなをば申ふらぬ六郎の
跡をゆく雨具ふき筆のなまこひ
あつはらうとて傷ふとてさるるハ
さすまふし折れこめて路次のかと
あつらふふりあふりれ

室の六郎も信す月行雲長白蛇
神の巫のむらやれ神の神とて
篇せ一孫也無戸室了ふを焚くふ

ちるむのなけしよ火とと見のなを
やれかしらら室の六郎とすふ
たをすくわたりけしこの流也将
この五郎といふ実を林やう縁記
の青せしけふもけし

世は日走との林やう流るらしらの
ふらふやうに家名を伸立ぬま
ふらふ世をよむとすまをよん

尸符や一類のそのの指も折れて
体はたんとといふも然の指を差す者
亦現して一も業門の元食順れ
くまきの人こそすけりやと
あつきのまはしりよはとこく
みろく唯せ智すもるなりて正
是偏固の者也剛毅本訓のた
をこそをらひと稟のは質を

さるゆ

卯月朔日所と一信れすは昔
此法とを二荒とすましとて
大師用基の時り先とみるよ
一歳末よをけりやとやと此
序文一たしくやと一恩沢公荒
よあふれに氏あ改の極極う
初原ましくとけりやと

何んきうと云ふ事ありあ
と誓ふに旅しめしきうい
白し

利根千 玉次郎とてり名文そと

雲を良、い合氏いしありあり
芭蕉の下ありし形をうりてや
新水若くときよくあつ
取しは家浮の眺共しえすを

収ひ道ハ羈旅の難をりしを
旅之既切々と利してきほく
をいし遊世とひきて宗悟と
何てそ誓ふにめをえん
まかひりしきうい

此條下らとせめて旅さる
頂あり地流ししあふま
此誓いよまふしあ若庄よ

ひろり入て滝の表のあまれい
らみりの龍とア付く行々也

将時ハ流くお細らや夏の時

ぬ頃の黒くねくとあまれいあま

としらぬとあまれいあまれい

あまれいとあまれいとあまれいと

りハ雨降りのあまれいとあま

いとあまれいとあまれいとあま

いとあまれいとあまれいとあま

いとあまれいとあまれいとあま

いとあまれいとあまれいとあま

いとあまれいとあまれいとあま

いとあまれいとあまれいとあま

いとあまれいとあまれいとあま

いとあまれいとあまれいとあま

いとあまれいとあまれいとあま

いとあまれいとあまれいとあま

いとあまれいとあまれいとあま

いとあまれいとあまれいとあま

にまきいしてしるる枝がふれして
くるとかきわくささげもぬれぬふの
やうにちりりれん

おちぬと八重き枝子の名をこゝろ

おて人にしるるふれあふいそを
つるよはゆたてををこゝろぬ

黒羽の節介峰ちるるけりしのおま
あはゆるさひうちぬあしりうはひ

田新法づりくそ共方根をまこを

えう羽々あふささひのあま

とけいで親属のすまもあ

うむりとぬりもささりいけい

よ道送して犬せわしをこゝろ

形頃の藤原をありして玉原のふの

古墳をこゝろあ八情実う備

土市麻の的を解りあふしと

永成氏神正八中人と云ふいへて
此神社しく何と云ふか 盛徳神
と云ふありと云ふと云ふる 昔あれは 枕家
宅より御ん

神験光明寺と云ふ者ありと云ふ
とてあり者 堂を御ん

夜ふと足跡と御ん 首途に
苗木と云ふ序との行くし 仰頂和馬

と云ふ法あり

飯上橋の五人と云ふぬ 寺あり

むじふと云ふやし 両方よりと云ふ

と云ふの云ふしと云ふ 昔と云ふ付あり

いつりも云ふしと云ふ 昔と云ふと云ふ

と云ふ所も云ふしと云ふ 昔と云ふ

と云ふいへてと云ふ 昔と云ふ

昔と云ふと云ふしと云ふ 昔と云ふ

思ハやくあるかきしきしんく分りぬ
かきしね秋つとく昔とてあてて弁
月のも介ねえし十糸あふふ
橋をわたりてし門より

さしてのほらいつのちとてやとほの
ふよふらのちれは石上の小菴若
座よむまんけらめ禅師のたつ
は雲は仰の石室とみし

木啄もあかやうす系末立
とちりあてをねしはけり
そよの殺せ石より鉄休も
ふししてさるふ此は竹のふの経圖
一ねとせしとしやこしとて
なをちりりのちと

野を横くするやし何し
殺せふは極糸のちよら後しけり

石の毒をよりのちらひしう輝

蝶のまじしはまらぬのこのくちを

うささきりみちりみほろふささき

折ハサ世折の甲人ありて田の畔

人ある此石の部守戸部某の

此柳々とる中ささと折くよのまじ

せしあまといつこのまじしを

しそ人ら此柳のうりりり

まもあつれ

田一板板し去る柳

と折るささき日とささき

の折しとて折ん定りぬい

都へと便ぬしとみん申さ

此折ハ三折のうりて風録の人

いとささき秋風を身うあ

みまを伴ししとる葉の折

ありけれ也卯のふのもあゝ秋の
ふのつりりしして常よりるる心
比よりたれ人し心とふし 衣巻社で
改し市とてほ捕の筆もしと
ふあし

卯のふをかりしと開のつら
とくししとあしすしとあしす
川を海へたりしと味根さく右

まゝ名城相馬之春の在常陸
の比をさししてとつるふしけはと
ふたをりよ今もはさし置えれ

新たりしとすしと川の舞しと等窮
とよふをさししてあしすしとあしす
先白けの園いしとすしとあしす
同も途のくししとあしすしとあしす
風景し記ししとあしすしとあしす

えきりしもの佐藤存可うの御入
たのし御一とて申すはる。佐藤の里
結瑞とて申すはるくけりし御入
しりし御入も申すはる。御入也林
し大寺の御入も人の御入ゆりしと
て御入も申すはる。御入の御入も
つ家の石碑も申す中しし御入
嫁らるるし。御入也申すはるも

ういししししんのせしししつるお
ろと社をぬししししししししし
色をぬししししししししししし
をんへは家ししししししししし
ういしししししししししししし

五月朔日
御入也

五月朔日
御入也
御入也
御入也

おのよ土竹のよ花をよみてあや
とて貝のよし灯のよるれいあ
この火のよしよとて病のよとて
針のよあよとて高竹のよとて
海にのよとてふりよとて
とてのよとて眠のよとてあは
おのりて海にのよとてえ
とてのよとてあはとてえ

おのよの金にのよとてあは
業のよのよとてあはとてえ
とてのよとてあはとてえ
とてのよとてあはとてえ
無常の觀念道路よとてえ
の今りのよとてあはとてえ
路にのよとてあはとてえ
とてのよとてあはとてえ

雪の流子の部に入ると、谷中谷実方
の松のいつののちと人々
のまゝなるまゝとてゆゑに
のまゝとてゆゑに
のまゝとてゆゑに
此の五月のやよいのいさよ
まゝにゆゑに
まゝにゆゑに

のおしゆまゝと

いさよのいつの月のやよい
まゝにゆゑに

武隈のおしゆまゝと
根ハ土のまゝとてゆゑに
のまゝとてゆゑに
はゆゑに
下り人々をゆゑに

の橋杭よりしるれ事なるのみとて
まはしやねいけしん様も
海より何とありは侍ありしに
結まよしん事やよ今將子
のしるきめをいそぐ
ねのしるきめをいそぐ

武深のねをいそぐとて
しるきめをいそぐ

橋杭にねのしるきめをいそぐ

名に川をいそぐとて
ねのしるきめをいそぐ
海より何とありは侍ありしに
結まよしん事やよ今將子
のしるきめをいそぐ
ねのしるきめをいそぐ
一日築白りて宮城師の故郷あり

靈碑 市川村多賀城

碑の石の寸六高十六尺餘横二尺計
其昔を考りて又字悲也四維國
界之教ををさる此城神龜元
年按察使鎮守府將軍大野相臣
東人之所置也天平宝字六年參
議東海東山節度使同將軍
惠養朝臣猶修造而十二月初日

と有聖武皇帝の比時上座あり
むしりたりを多賀城あり
後傳ふと云ふ山前川あり
いふと云ふ石ありて云ふと云ふ
おはれと云ふと云ふと云ふと云ふ
代々の事ありて云ふと云ふと云ふ
の事ありて云ふと云ふと云ふと云ふ
山前川の記念を今取おし主人の心

を問すり船の一極致余の
嘆い薪旅の苦をあらわして
泪もあらずとち也

これより伊豆の志川伴の心をあらわ
す乃れはふかきとて末ねとて
ねのあひく皆憂ひとてくを
うりてをとつてあはれあはれ
はしくのそととと少くも
して

はるすの浦へ入おのりぬき
あつたを解くれて夕月あつた
あつたを解くれて夕月あつた
きつてきてみりてあつた
てふりてあつたあつた
いして哀也其れ目言はゆる
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

まもあしひらひさるる
とて枕ちのうい
すまの遺風
み後
の神
て宮
うい石の階
あのみ

果て土の境
か
い
あ
三
今
あ
今

旅人往道を歩みよとて
名をきくこよとてきくこよとて
午よらけし影をうけて
其間之里除碓氷の山
柀（たけ）の影をうけて
一のぬれりして
東南あり海とて
湘江の湖をまきふ

あしを歌りの天を
をばし（ま）の
之重よきとて
あしを
うき
ぬれり
て
て
て

神のむしー大いすあふふのわ
うや造化の天子しつきの人の等
をふりひひひくとてあさ

雄治の張い地てうて海あり
治也雲飛輝師のふ堂の治
唯石ころる将おのふはく
せといふ人し稀くくくくく
さし種ねをささりふちをさあ

巻四の序うーいあの人

とくしすふくくくくくくく
ふくくく月海くくくくくく
又あしそむにうくくくく
ふれは空をひくくくくく
風雲の中く流うほくくく

あやーまきうてあふふのわ
松崎やあふふのわ

尋ハハヤトモテテ 願ハシクシイレ
らハシクハハシクハハシクハハシク
ハハシクハハシクハハシクハハシク
ハハシクハハシクハハシクハハシク
ハハシクハハシクハハシクハハシク
ハハシクハハシクハハシクハハシク
ハハシクハハシクハハシクハハシク
ハハシクハハシクハハシクハハシク
ハハシクハハシクハハシクハハシク
ハハシクハハシクハハシクハハシク

キ一日瑞雲寺より瑞雲寺まで二十と
世の昔より今までの事ばかり出たて

入者切羽の及回しきりて
雲の禪所の法化は信て七堂

雲の禪所の法化は信て七堂
雲の禪所の法化は信て七堂

以土成就の大伽藍とて
彼見仏聖のなるハいつてもやん

ナニ日平和水とて
新しきの徳をよけ得て人徳

と難 危 蕪 堯 の 徳 よ け 得 得

とてわたりぬる路をきいて
石の巻といふ瀝しおこぬ西候
とてみてもよむら金花よ海を
見たりし數百カ廻入江つと
ひ人及地をいしういし毫の
控まつてくまふ心いさやア
下よもまぬるやとちんとなれ
とて又よるうま人ういし
御まを

小室よつおをいしとつれ
みえぬたちをいし神のち
尾ぬりの牧場の草のうら
のうらをいしをいしをいし
まきとよようて戸伊たを
一室して千泉よるを其間
余里をいしをいし
三代のま耀一燈のやう

す煙堂の二将の像をとりし
光堂の二侍の権を納り二堂の
佛を安置す十宝をまじりて
殊の扉風をたき金のかた
雪よちて既頽廢して虚の叢
とあぐきをを四面射は固く
を雲雀も風をを流す舟子
かに人をもくはるる

五月の舟の川に物光堂の
南戸通らるるやあはるるの
中又ゆるり小舟の舟の山
さしてあはるるの舟の尿
しりかて出羽の舟の舟
此路旅人帰るる舟の舟
舟の上り舟の舟の舟
舟の上り舟の舟の舟

日氣清々くれと野人の家をもえ
うけし金もかむご風ぬれ
てりりるまごささりよ遠なるより

冬風するの尿する我もと
あさりの云もち出羽のちり
たしをほめてるささりさ
れたるささりの人さす我も
ささりささりささり人を

おろぬか宛竟のいふ者及銀指
をよこさる櫻の杖と推りてあは

えよまきでしりりふふああ

うさめりもあよへきりられと

まきこみをとらしてほよつて

りあさりのいふまきりりあひ

森こごして一鳥あつささりの

下園あひりあひしてあさり

雨ら知らよつちかへん心比して
海の中踏ふく水をやうり
と遊し肌よつちかへん心比して
しる家上の唐よ木川よの
兼白とくおのこのまわりはみち
必不用のしるまをさへん心比して
まじくしては人をさへん心比して
これねんよつちかへん心比して

乃也

尾名澤とくし清風とく有とく
ぬきまはるものまをさへん心比して

しる都しおくまをさへん心比して
しる旅のまをさへん心比して

しるて去途のしるまをさへん心比して
しるしるしる

流しとくおのこのまをさへん心比して

家上川の八人と大石田とあり

日初を待たせりよとあると誹諧の程

うわれてふれぬふめちうとある

し草人篇つあるのつとやうとある

やたふとあるありて新古抄

道了、あかきうとあるとみくら

ちうへとある人うとあるとあり

とある一をあるとあるの風流

家上川あり

家上川八みらのくありとある

と水とありとあるとあるとある

ありとありとあるとあるとある

とありとありとありとありとあり

とありとありとありとありとあり

とありとありとありとありとあり

とありとありとありとありとあり

仙人を尊と号しは修して遠くをうらむ
さつらん其あわこし

六月の夜をたつて早くうらむと
いふ

六月の夜羽黒ふらむをる國司た吉

まゝ考てうらむて別とけ代々をえあ

例利は指り南谷のふ流り

今して憐愍の流こまやうと

あつてさし

は日本坊もあつて誂昔具り

有難や雲とくりす南谷

五日構取は指當山岡國能除

大師はいつその代の人とてを

そして是喜式は羽列里山の神

社と有書寫黒の字と甲ふと

うらむらうや羽列黒ふと中

て羽黒ふとくうや出羽くいつと

鳥の毛羽と共周の貢と敵と
風土記に云く元月と海敵
を合て三とて當寺茂江東
敵と屈して天台止觀の月明
くくく内は融通の法の灯と
くくく僧坊棟とくくく修験
行法と廟と一矣と玉靈地の演
如人貴也とくく繁榮長くと

くくく山と借りくく
八日月とくく木綿とくく
くくく資家とくくく
くくく氷雪と踏てのくく
くく八里とくく日月行たの雲
くくくくくくくくく
頂上と露水と日没て月照る

毎朝浦の傍を枕して卧して
ゆくをたのむをてしきほもて
湯後くくく

谷の傍く銀流の谷と云ふは此の
流の流氷を掬てくくく御
しと叙と打鉄月とと銘と切
て世よ貴をくくく彼龍泉と叙
と評とわ干将莫邪めむと

そよ道よ松林の松あそくぬ
市よ水よそりそりそりそり
とくくくくくくくくくく
松のつらくくくくくくくく
流氷のつらくくくくくくく
とくくくくくくくくくく
松のつらくくくくくくく
流氷のつらくくくくくくく
とくくくくくくくくくく

無非此世

心無所住

即空

谷中無粟

雖有雷水之聲

而無打鼓之勢

了世上賞之破龍泉

在解之命十持莫耶

若き日を海にいでたかたは上川

江より陸の風をぬきとるなりし

今歳はよく方丁と貴方の御膝

より東北の風をぬきとるなりし

いふこそよきなり共陸十里り

下かきつれば風をぬきとるなりし

雨濛朧としてる風のよきなりし

園中よく莫他しく雨とみ奇せと

きは雨後の晴色より無きなりし

の雲をよと膝にいとくしるの晴

をよとくしるの晴色より無きなりし

やうにすくしるの晴色より無きなりし

うよとくしるの晴色より無きなりし

うよとくしるの晴色より無きなりし

うよとくしるの晴色より無きなりし

うよとくしるの晴色より無きなりし

の流人々をのぞきし江止し山後

つり神功后宮の御墓と云ふ

と干満殊ると云はれやまゝの奇

ありし木いふさびしうら

やしわけきよのさまよはし

るるを探そ風流一脈のち

あけし南より海天をほ

是はうづらし江のあり西

の閑渚をめぐり東に流るる

舟四より少なるる海北より

えり流り今もあはれし

之江の修徳一里をめぐり

くまいて又異なりおぼ

かく象深はらむとて

はらむしみとくくく地

をみわくくく

象深也而し我龍孫子あふ
以神也勢はきぬし海陸

みま

象深也神子あふ

象の象やう程をなめて又は

象と 雌鳩のさあま

けえぬ突ありのやみまの象

酒田の余はりると言して此陸の

やうをいぼくらのきりい物をい

かたきく 加賀の府をうけて百世

とや象の園とて命をいぬは

の地とまかりをいぼくちの

ふ一ゆりの神子あふは丸日

若はのさう神とてうたう

初はあてをいぬまをい

二月廿六日しるのち六時

荒海を佐渡よりさかす天の

今ハ親しくしる子とて大いし

終つてしる北國一か所ありと

思つたれどもを捲引よきと

存しよと一箇所を西のこり

ありと女のありと二人とてこり

ふたつしるゆめとのこりよとて

物語しるよとよげんおほのしる

ほとと石のむすめかへりかき

するしるは國として女のこり

ありとよきとてしるよとて

そととてしるよとてしるよと

わたりしるよとてしるよと

ありとてしるよとてしるよと

そととてしるよとてしるよと

うよいさういあきとく
赤入てあしおきくくあし
むらりり赤くくあきあ
うよあうりさあふりあ
あわああああああああ
ひあん衣の上のりあああ
ああああああああああ
ああああああああああ

あはああああああああ
ああああああああああ
あしりりー神明のあああ
ああああああああああ
ああああああああああ

ああああああああああ
ああああああああああ
ああああああああああ
ああああああああああ

わ川をわめて那古と云ふ
生獲籠の考はに表すうすも
知ぬのよとてかへきりあふと
人よあられそとあり五里いろ
けりしてあふあふはなよ
雲のせはあふとくろく水えき
の一程あふとありあふと
ついにとたれてこの國に入

とせの糸や
糸のふとくありとて

今頃ハ七月中の五日し

大坂よりふ商人伊波と云者

そと水にあふと

一笑と云りのハはゆよ

ふのくすくす世よ知人と云

よとあふと

よふかきんぼよー 花のつぼみ

うめーー 花のつぼみ

花のつぼみ

いんちや田の下乃きりくす

よ申の温り水よりりりり

うん 花のつぼみ

花のつぼみ 観音堂ありふ

よのはきし 三十三ののり

とやととゆい 大正大正

の縁と安んじ 花のつぼみ

とやととゆい 花のつぼみ

二葉をもちり 花のつぼみ

石とくし 花のつぼみ

花のつぼみ 花のつぼみ

花のつぼみ 花のつぼみ

花のつぼみ 花のつぼみ

温泉に浴し其功なるべし

山中に菊ハさかしく咲くは白

くちんとてまおハ久保を御して

いづれも童しりれハ又誹諧を

好む俗の眞実なる少年のしり

うましかりに肌紙に寄

りて終るゆへ貞徳の欠

とまひてせしむる功名

は一村判官の料を信てと

て今又むしり信とハるりぬ

善良の暇を物て任りぬの

固き心とておまのりあれた

笑きてしりぬ

いづれもそれ休むとて此の

とておまのりぬ

終りのうらみ 隻巻のおは
たしよ ちよよ ちよよ ちよよ

今日はちよよ ちよよ ちよよ
大聖寺の城 全 出 全
ちよよ ちよよ ちよよ
ちよよ ちよよ ちよよ
ちよよ ちよよ ちよよ

吾も 妹 風 ちよよ ちよよ
ちよよ ちよよ ちよよ 鐘 ちよよ
食 ちよよ ちよよ ちよよ
ちよよ ちよよ ちよよ ちよよ
ちよよ ちよよ ちよよ ちよよ
ちよよ ちよよ ちよよ ちよよ

つゆ今欲あしからみて

おかしな御引はく金所求

五丁了らく入金永平をり

下道之御師の御事や邦様

ふ里を避てうらむら御事

此をのしりかやも貴き人

有しわ

福弁ハ二里計あれり又限

そしうてあつしちうりぬの

路しりく一うらむ等兼し

あさ隠士もといつきのく

御事りもあつて事をも

下と御あししいうた

てうらむや将死らむ

あちれといやうなる

うらむとあふ市中ら

引めてうやうやの山宮より女を
登らうのめいめいとうつてし 勢いよく

まゝにうやうやをいふとくこのまゝに

はらりよふおととくとおととと

うやうやの女のおとといつてし

わりのうやうやのうやうや

うやうやうやうやうやうや

うやうやうやうやうやうや

うやうやうやうやうやうや

うやうやうやうやうやうや

うやうやうやうやうやうや

うやうやうやうやうやうや

うやうやうやうやうやうや

うやうやうやうやうやうや

うやうやうやうやうやうや

うやうやうやうやうやうや

うやうやうやうやうやうや

うやうやうやうやうやうや

うやうやうやうやうやうや

往昔遊し二世の士人大衆
為發起のより有りてついでに
と刻するも多かりし泥濘を
これにててま清は其の如
うし古例今もついでに神宗
ついでに多かりしゆふ。これを
世のの形おとすの如く亭を
のりてついでに

月清一遊川のほとり
十六の土のまのりてついでに
二十二年

年月の小園のふたをみだ
十六の命の宗のついでに
小泉のついでに種のはりて
ついでに七里のついでに大泉のついでに
ついでに小泉のついでに

此一書芭蕉翁の未讀々武陵石記
 此家の松花ちりちりといふ友だちの
 ありしに、いふ勢のいふ多葉のて
 送るるふを契ぬき一の記しりて
 又喜のふと夫中書燈の字に流り
 あれは白字よりいへておこせ世に
 飛ぶんとみよと回志の勢、勸るる應
 様、初朝のふと下よ、得て力とふとふさ
 早ぬ

千崎と保小の
 咲春初七日取



即起身
 芳徳下義



